無給としてのボランティア

近藤良樹

１．なぜ、無給なのか

ボランティアは、「無給」「無償」であることを根本特色の一つとする。ボランティアは労働をもってなり、資本制のもとでは、労働は賃金という報酬があってのものであるから、無給、無賃金のボランティアは、資本制の常識を否定したものとして目立つ。

かつては、ボランティアは、有閑・有産階級の善意にあふれた人々が行なうものであった。そこでは、お金があり恵まれている人なり団体（宗教教団など）が、恵まれない重病人や貧困にあえぐ人々を救済するというような、単純化していえば、有産者と極貧の無産者の関係になっていた。ボランティアするものは、自分を労働力商品として売って賃金をえるということの不要な、そういうことに無縁なひとびとであった。ボランティアの無給・無償は、その受け手がお金をだせないということはもちろんだが、ボランティア自身の方で報酬は不要だ、自分たちは賃金労働者ではないということだったのである。

しかし、現代のボランティアは、賃金労働によって生活をささえている一般市民が、その余暇に参加するというのがふつうである。謝礼としてお金がでるのなら、ありがたく受け取ることであろう。だが、ボランティアされる方は、たいがいが、お金の余裕がなくてサービス労働を買うことができないような状態にある。つまり、賃金などをだすことができないのである。ボランティアする方は、断っているというよりは、出せない相手ということで、これを放棄しているのであり、「賃金はでない」ということをふまえて、奉仕の活動に参加しているのである。

また、今日のようにボランティアが盛んになってみんなが多方面にわたってやりだすと、出す余裕がないというよりも、出してくれる相手がいないとかはっきりしないというようなことも結構でてくる。山道とか海辺の掃除などでは、お金を出してくれるところがないとか、管理者からいうと余計なことで支払い義務はないといったことになる。地域の全体のためにする活動は、その全体（管理者）の方で、やる必要性を認めていて予算的余裕があれば、有償とすることができよう。しかし、それ以上のものは、その全体の責任外のことであり、ボランティアが勝手にやっているのだから、それへの支出は、余裕があっても、しないことになろう。

この自分のすきでやる、たとえば、だれから頼まれもしないのにする山道の掃除のようなボランティアは、ボランティアといえるのかどうかも問題であろう。ボランティアは、本来的に、特定の具体的な労働の求められていることが大前提で、そういう求めの欠けたものは、余計なお世話であり、ためになると勝手に思い込んでいるのみの、いわば贈与の押し売りであって、受け手は、謝礼をだすどころかボランティアとすら見なさない可能性がある。しかし、やっている方は、ボランティアのつもりではある。それは、「よけいなボランティア」というべきか、もはや「ボランティアではない」というべきかになるが、主観的には、ボランティアするものは、ボランティアのつもりであるから（近視眼的な人々にはよけいなことでも、未来の者に多大な貢献をしている可能性もあることだし）、場合によっては、尊大な姿勢のボランティアなどとともに、

「問題のあるボランティア」の項目にでもいれられるとよいのかもしれない。

労働・勤労の提供をしてもボランティアのかかわるようなところでは、賃金など期待できないということがあるわけだが、単にそういう消極的なことにとどまるだけではない。ボランティアする者は、日頃は労働者として労働力を売って生活しているが、ボランティアにおいては、そういう賃金労働者であることを超越した存在となって、ひたすらに世の中に自らの役立つことを願い、お金など全然意に介さないのであり、無償の贈与者に自己を高めようとしているのでもあろう。この点では、有閑階級のボランティアと同様、報酬・賃金は、ことわっているのである。

さらに、宗教団体のボランティア活動などでは、「人間みな兄弟」という慈悲、慈愛の精神が、これを無給とさせていることもありそうである。つまり、主婦がうちのものには「無給」で献身するように、宗教者は、そとの他人に対して、あたかも自分のうちのもの、「親子」「兄弟」にするかのように奉仕するということである。その勤労を無給・無報酬とすることで、あたかも兄弟関係であるかのような近さになり、おそらく、そのきわみには、無差別一体の境地にと高揚することが可能になるのであろう。

この宗教団体のボランティアの「うち」意識、一体化の意識は、他の一般のボランティアでもありそうである。自分の商店街のイベントのボランティアなど、ひとのためにというのみではなく、自分のためのものでもあり、自分も主催者かその同類のものとなるのである。自分たちの神社のお祭りには、当然ながら、手当てとか、日当なくして、自主参加するが、今の商店街のイベントは、そういうお祭り意識の延長上にあるのではないか。手当てなどもらうとなると、それこそ「よそ者」という感じになり、無償・無給ゆえに、自分もその共同体の一員であり、「うち」のもの、同じ仲間であると自覚できるのであろう。

スポーツ大会などにボランティアで若者が参加するのも、そういう意識ではないか。自分たち自身が主催者であり、お祭りに参加し支え、これに一体的になっているのだと。さらに、そういうお祭り・イベントの場合、その勤労の奉仕は、労働でありつつも、あそび感覚ともなっていることがある。音楽のバンドがボランティアで祭りに参加する場合など、奉仕意識よりは、自分の音楽を聞いてもらえるチャンスであり、楽しみであって、あそびなのである。「無給でも出たい、参加したい」というのが祭り・イベントのボランティアになり、その活動は、あそびと無区別になっているのである。

２．生活の支えは別のところに確保

ボランティアは、余暇の自由な時間を使ってなされるものである。それが可能になる前提には、生活の支えは別のところにあるということがある。無給のボランティアの背後には、同一人における有給の、生活をそれで可能とする本業があり、あるいは確かな保護者・扶養者があったり、資本とか土地が存在しているのである。それがあるからボランティアは、無給でかまわないことになっているのである。

自分の生活そのものは、安全なところに維持しつづけているという点では、ボランティアの精神は、甘い生半可なものととれなくもない。自分のすべてをかけてつくすというようなもので

はかならずしもない。だが、それであるからこそ、誰でもが参加できるのである。生活をすててまで献身するとなると、普通の者にはできないであろうが、ボランティアは、そうできなくても、生活をそのままに維持しながらでも、恵まれない人に奉仕し献身できるというのである。

また、ボランティアされる方も、それであるからこそ、気軽にこれを受けることができるのである。ぜいたくとも思われるようなことを、極貧の奉仕者に求めることは気が引けるであろう。自分の生活などどうなろうと平気だと、極貧の失業者がボランティアするとしても、おそらく民主主義下の現代人の感覚では、これを受ける方が困ることになる。めぐまれた自分が、恵まれないボランティアに恵みをいただくなどということは、普通の神経の持ち主には、できないであろう。だが、裕福なボランティアにならば、それを求めることも可能となる。ぎりぎりの厳格な生活をしている聖僧には、いくら愛他精神にあふれていても、町にぜいたく品の買物にいきたいからと付き添いのボランティアをたのむことはできないが、お金持ちのボランティアになら、それをたのむことができる。

生活の保障がべつのところにしっかりとあるから、その余暇の余裕には他者のために無料で奉仕しようというのだとしたら、その生活があやうくなると、ボランティアは、終わりである。生活のために、ボランティアしていた時間もまわさなくてはならない。お金をもとめて、有給の仕事にその時間も費やすことになる。あるいは、失業し有給の仕事がなくなって、生活が困難になる場合、時間的な暇はいくらでもあるとしても、ボランティアの仕事であっても、できるものなら有給化したくなるであろう。

ボランティアではないが、他人のために自分の生活もささげて、極貧をものともせず、社会の改革のためにと精力を注いでいくものに社会運動家・革命家がいた。かれらが自分の生活を無視しても、極貧でも、人々は、これを「是」として受け入れてきた。それは、その活動・運動が、ふつうは個人の救済を直接てがけるものではなく、社会全体の救済に向けられていたこととともに、それが崇高で英雄的なものと周囲から評価され、経済的貧困を背後に退けてしまうようなところがあったからであろう。当人も、前衛・先駆者としての誇りをもち、それが当の社会なり天から自分に与えられた尊い「使命」なのだと考えていた。貧困を救う者は、その貧困のなかに自らも立脚して、その先頭にたってという英雄意識があった。しいたげられた貧困な人々にとって、リーダーが貧困であることは、自分たちの味方であることのわかりやすい印しですらありえた。

だが、ボランティアは、かならずしも英雄的ではない。ごく日常のこまごまとしたことの手助けをしようというのが普通のボランティアのすることである。革命家は、その活動を労働に向けるものでも、個々の恵まれない人々にこれを贈与しようというのでもない。富の分配の公正さを求め、有産階級全体からその不当に蓄積された富をうばい、これをしいたげられた人々にまわそうというのであり、自身もそれの分与にあずかる一員となってよいのである。これに対してボランティアは、自分の労働力を恵まれないものに直接贈与しようというのである。相手の田畑に出かけてこれを耕し収穫の手助けをしようというのである。そんなボランティアに極貧の者が従事していたら、まずは「自分の土地をたがやすことからはじめなさい」「まずは、自分自身を救いなさい」といわれることであろう。

ボランティアのなかには、革命家と同様、自分の生活そのものをかけて、極貧のものたちのなかに飛び込んでかれらの手足となり、ともどもに苦しんでいこうという、スラム街の「マリア」といわれるような尊いボランティアとなるものもいる。１９世紀イギリスにはじまったセツルメント運動は、貧民街に住み込んで貧民の自立に尽力しようという定住(settlement)のボランティア的運動であった。仏教でいう「菩薩行」は、ひとが幸せにならないかぎり自分も幸せにはならない、人のためになるなら、命すらもかけていこうという徹底的な愛他の精神にたつ。障害者用の施設をつくり生活そのものをそこにかけていく、それを自らの尊い「使命」とするボランティアもある。だが、そういうボランティアは、現代のボランティアとしては、特殊である。人生そのものをこれにかけ情熱をそそぐ「使命」とはちがって、現代われわれが見聞きするふつうのボランティアは、俗人が「余暇を有効に」ということが基本であろう。だれにでもでき、他人とともに自分も大切にし、自分の恵まれた状態を、恵まれない人々と分かち合いたいと願うものが今日いわれる一般的なボランティアではないか。

３．wage(賃金)はないが、reward(報い)はある

資本制下の労働は、なにより賃金が目的であり、これに引かれ駆り立てられることになるが、ボランティアは、無償・無報酬であるから、そのことからいうと、これに駆り立てるものを欠くことになる。しかし、やはりなんらかの形で、「ボランティアしなくては」「ボランティアしたい」とかりたてていくものがなくては、参加を決意するまでにはなりにくいであろう。ひとの行為は、それに対する報奨(reward)と罰(punishment)によって促進されたり抑圧されることになるが、それは、ボランティアでも同様である。

建て前論としてのボランティアの動機の筆頭には、「利他主義」があげられる。だが、それだけでは、個人主義のこの世の中に人が持続してボランティアするのはおかしい、なにかボランティアするもの自身にプラスになるものがあるはずだと、その満たされ魅せられる何かが探されることになる。

ボランティアは、家族にするように外の人に接する。家族への愛は、むくわれないことが多い。それでも、多くの親は、こどもに献身しつづける。その姿勢がボランティアではそとの人に向けられているのである。勤労への賃金での報いがないのみならず、ときには勤労の贈与者への感謝のことばもかえってこないことがある。追いつめられ生存すらあやうい厳しい状態のなかでの難民などからは、ボランティアには、不平不満がぶつけられはしても、感謝などはされないというようなことが当然でてくる。ボランティアは、無償の贈与なのだから、感謝されるべきものではあるが、贈与される方は、かならずしも、そういう反応はしめさないし、場合によると余計なことをと非難されさえする。

だが、この利他主義の活動に、利他の信念をもつひとのみではなく、そういう信念など無縁のものでも、けっこう引き付けられ魅せられるものがあるようである。なんらかの形の満たされるものが、広い意味での報い・報奨があって、これがひとをボランティアに引き付けることになっているように思われる。金子郁容は、ボランティアは、「ある種の「報酬」を求めて」いると

さえいう(註１)。つまり、無償だから、お金は求めていないが、「お金に換算できない」「多様な価値」（註２）をもとめ、それが満たされているのだという。それについてボランティアの報酬は「閉じていて開いているもの」と規定する(註３)。ボランティアして与えられる価値について、「何に価値を見いだすかは、その人が自分で決めるもの」として「閉じて」いるのであり、かつ、それはボランティアの受け手なり、他の関係者から「与えられる」ものとして「開いている」のだと(註４)。ボランティアが、そのボランティア活動において、ひとのやさしさに感動したとすると、それが自分の見いだした価値であり、与えられた価値になるということである。

資本制のもとでは多くが経済的価値に還元されていくが、多様な経済外的価値の世界もあるのであって、ボランティアにおいて、われわれは、そのことを実感することができる。ボランティアにおいては、経済的価値の点をのぞくと、実は「与えるよりも、多くを得た」という感想を聞くことがしばしばとなるのである。

まずは、贈与することにともなう一般的な快感情（一体感とか、喜び、恵まれた自己への感謝等）がある。さらに、労働であるから、その創造的活動への満足感とか、サービスではとくに、ひとの社会性・社交性の充足があり、ひとのやさしさとか意外性の発見への感動・驚嘆がある。なによりの報奨は、生きがいが見いだされることであろう。寄付などでは、その役立ちはかならずしもはっきりしないが、ボランティアは、自身が労働し現場に居合わせていて、自分が社会的に役立っているのだとしっかりと実感できる。あるいは、この冷酷な資本制のただなかにいてボランティアにおいて出会う人々のあたたかい善意に感動を覚えることも少なくない。

また、宗教人がボランティアをするばあいには、ボランティアにおいて自己変革が促進され、ささやかではあれ、無私で慈悲心にあふれた、いわゆる「菩薩行」となっていることがあげられねばならないであろう。この菩薩行は、宗教人のみのことではなく、ボランティアに参加するみんなの感受できることがらであって、「餓鬼」「畜生」のたぐいの日頃の自分たちがそのことで一時にせよ「菩薩」のくらいに高められるのだとしたら、これは、人生の大事件であって、なににもかえがたい報奨となる可能性がある。

４．有給ボランティアの問題

「有給ボランティア paid volunteer」ということばがある。無給・無償がボランティアの根本特徴のひとつだから、これは、形容矛盾である。しかし、かならずしも、無給にとどまらない場合がボランティアにおいてある。ボランティアの根本特徴には他に勤労や自発性があると思われるが、これらもそれの希薄なものがあって、「非勤労ボランティア」とか「強制ボランティア」という形容矛盾のボランティアも存在する。つまり、ボランティアは、勤労だが、イベント・お祭りへの参加など、楽しいもので「遊び」とひとつになりうるから「非勤労ボランティア」は可能であり、学校の清掃のボランティアに、「こどもが質にとられているからしかたがない」と、いやいやに参加しているとしたら、非自発的な「強制ボランティア」も存在する。ボランティアは、勤労で自発的で無給だが、それを理想型にして、それがまったくない非勤労・強制・有給を反対の極において、そのあいだに、その理想型の方向に（これらの特徴のいずれかをつよくもっ

てボランティアと言われて)、より理想的典型的なボランティアが存在するのだと見てよいのではなかろうか。

ボランティアに踏み切ろうとするばあい、少なくともその場ではエゴイズムの克服が必要で、自身の利己的な欲望・エゴをおさえ、強制しているのであるから、その点からは、根本的に、ボランティアには、「強制」の性格があるともいえる。勤労の点にしても、生活のための難行苦行の、しばしば疎外的となる「労働」「勤労」と異なって、ボランティアは、自由で自己実現的であり、もともと非勤労的だともいえる。

「有給」「有償」という点についても、広い意味での報酬・報いは、おそらくどんなボランティアにも存在していて、お金にかえがたい、経済外的な豊かな価値を受け取っているのである。だが、実際にお金をもらう、狭義における「有給」のボランティアも存在する。海外に出かけて難民援助、治安の維持、生活改善に献身していくひとたちは、生活全体をそこにかけ、身を挺してボランティアに参加しているのであって、ある程度の生活の保障がなくてはやっていけない。有給ということになる。また、「交通費」の名目で少しぐらい出して感謝の気持ちをということは、ごくふつうの話であり、薄給ではあるが有給となっているばあいもある。アメリカの学校でのボランティアを紹介している本に、「stipend（俸給)」(註５)をすこしだしているというのがあったが、このことばは、われわれでいうと「寸志」「足代」に相当するものであろうか。

さらに、実質的に本人はちゃんと賃金をえているものもある。勤務先(会社とか官公庁)を「有給」のままに休んで、その承認を得ながら、ボランティアに参加する「有給」ボランティアである。「ボランティア休暇」を本来の有給休暇とは別にもうけることが試みられるようになってもいる。この場合、雇用者は、賃金をふつう通りに支払っていて、ボランティアする者は、雇用先の仕事ではなく、別の仕事を自己の選択においておこなうわけで、出張先がふつうのそれとはちがうだけだともいえる。実質的には、ボランティアしているのは、実は会社などの雇用先になるわけである。

近所の道路のそうじをするようなボランティアとちがって、老人の介護とか大規模な国際的な援助活動になると、これをコーディネートするなどの組織的な展開が必要となる。「赤十字」のような恒常的な活動とその組織が求められる。それを可能とするのは、それに専念する専門家・専従者たちである。これらの人々は、その生活をそれにかけているのであれば、かすみをたべて生きるわけにはいかないから、当然、それなりの生活保障が必要で、つまりは、この専門的なボランティアは有給とならざるをえないことであろう(資金不足がふつうの小ボランティア組織の場合、すずめのなみだ程度の有給でのスタッフということになるが)。なお、ボランティア組織は、大規模になるほど、ふつうの会社に就職するのと同じ意識で、そこに勤務するものをかかえることにもなる。そういうひとは、ボランティア組織に属してはいるけれども、賃金を目的に就職しているのであって、当然ながらボランティアとはいえない。

なかには、お金はまったく出さないけれども、ボランティアしたその労働時間を点数化して、これを将来自分がボランティアしてもらうための貯蓄とするというようなシステムをつくって、ボランティアに勧誘している団体もある(註６)。そのボランティアは、将来のサービスを受ける

元手になるものであり、無給ではなく、その時間分、将来、労働給付を受けられるというわけで、貯金するようなもので、有給になっているのだともいえる。とはいえ、厳密に労働した時間分が貯蓄されて、将来支払われるということの保証はないようで、ボランティアに市民をさそいだすための方便になっているのだという方がよいようにも思われる。これを金子郁容は、「Ｖ切符制度」（註７）と称しているが（ＶとはvolunteerのＶからとったもの）、こういうＶ切符制度をもつわが国のボランティア団体はかなりの数になるようだから（註８）、相互に連携していくなら、単にボランティアに誘うための方便にとどまらず、現実的な制度となる可能性をもっているものなのかも知れない。

有給ボランティアでは、利用者に対して有料にする「有料ボランティア」という発想もある。ボランティアは、無給・無料だということで、「ただ」ならばと、いい気になってこれを利用する不埒なものもでてくる。訪問看護のボランティアにながく専念してきた松村静子は、対談のなかで、「日本人というのは甘えと依存の構造が底辺にありますから、馴れてしまうと、今日は日曜日だけど自分はゴルフに行きたいから、看護婦さん来てみていてくれないかなんていう関係になってしまう」と言い、けじめをつけるために、専門職の人がそのサービスを、特別に時間をとってボランティア精神でするというようなときには、「ある意味ではきちんと有料化」した方がいい、「有料であってもいいわけです」と提言している（註９）。

有料化、有償化は、おそらくボランティアの根幹にかかわる問題であり、当然、そんなものボランティアではないという声が聞こえてきそうである。だが、長年のボランティア経験からそう考えるようになったという松村さんの主張は、あるいは、半ボランティアでしかないことになるのかもしれないが、貴重な意見ではないかと思われる。海外の援助活動に出かけるボランティアは、生活できるだけのお金が出されるのが普通であり、ボランティアは絶対に無償・無給でなくてはならないとはいえない。ただし、資本制下のいわゆる賃金労働のように、「お金」「賃金」が目的となるものであってはならないであろう。肝心かなめのところは、自発的に奉仕し無私無欲で献身するボランティア精神からなっていて、それをスムースに展開するための一手段として「お金」が位置付けられているのであれば、「有料化」したボランティアがあってもよいのではなかろうか。

５．無給のマイナス面

ボランティアは、無責任で頼りないといわれることがある。それでも、恵まれないものとしては、ほかにたのみようがなければ、これに依存する以外ない。ボランティアは、自発的な自由意志によってなされるものとして、勝手にこれを停止したりしても、道徳的責任はまぬがれないとしても自由といえば自由である。それは、「無給」であることを切り札とする。無給が無責任・頼りなさの免罪符となる。「只働きなのに、あれこれ命令されたり文句をいわれたりする筋合いはない、そんなのなら、やめた」ということが可能である。

有償であれば、その賃金・報酬に見合うだけの仕事をしなくてはならない。いやなことであって、最後までやりとおす厳しさが求められる。雇用主がそう求めるだけでなく、賃金をもらっ

て働く労働者自身もそういう自覚をもつのがふつうである。難行苦行の厳しさと引き替えに賃金がもらえるのであり、これを途中でなげだすとしたら、それなりの責任をとることが必要となる。賃金がカットされたり、ものによっては、それ相当の損害賠償をひきうけねばならない。ボランティアは、その点、無給ゆえに、甘さがでてくる。義勇兵・消防団のように、強い規律・組織的な活動がはじめから前提されていてこれに加わるような場合はべつだが、ふつうには、生活に支障がでてくると、ボランティアはやめて生活を優先させることになる。厳しさに欠け、頼りないものになりがちである。

ボランティアでは、全体的公平さに欠けることもある。自分たちが自発的に自由に選択して、自分の活動を贈与しようというのであり、他人からとやかくいわれる筋合いはない　のである。ひとから見るとひいきしていようと、道徳的に批判されることはあっても、それだけのことであって、当人の労働は当人の自由になるものである。ぜいたくな恋人に贈与しようと、困窮しているあかの他人にであろうと、あるいは、贈与を停止しようと、勝手といえば勝手である。自発的な自由な活動としてのボランティアは、贈与の相手も自由に選ぶ。ひとに雇われているのではなく、無給であるから、命令されることはないのである。

無給としてのボランティアは、アメリカでは、別の方面から問題になってきているようである。つまり「社会的地位の計測としての有給の重要性が増大する」（註１０）なかでは、ボランティアする「無給」の自分は、有給化できるほどの存在ではなく、単なる見習い・研修生でしかないと低く評価されているのだと意識してしまうことがあるというのである。同一のコミュニティーに持続して住むことが少なくなるとともに「社会的地位の計測」は、収入や車や衣服などによって計る傾向が大きくなり、ボランティアの「無給の地位」は「非専門的」で「その労働は無価値」（註１１）と見下されて、ボランティアは、無能力の証になりかねないと感じられる傾向が出てきているとのことである。「組織的生活でのお金の象徴的価値が大きくなるとともに、ボランティアの強調は必然的に減少する」（註１２）と。お金がすべてとなる世の中では、ボランティアは、なくなる可能性もあるということになる。アメリカの場合、いずれは有給で雇うつもりでも、未熟な訓練生のあいだは、これを無給として、それをボランティアと称していることがあるようで、こういうボランティアは、たしかに「給料のもらえない」未熟者の代名詞となっている面があるのである。

これとかかわることだが、ボランティアは、無給の労働者として、有償のいわゆる賃金労働者の生活をおびやかす可能性をもつ。神戸の震災においては、ボランティアの無償の医療や、無料での必要品の給付が行なわれたが、地域の医療機関が回復するにともなって、医療ボランティアは、ひきあげていった。商店が仮店舗をつくるころには、必要品の給付や炊き出しのボランティアもひきあげていった。かりにそれらのボランティアがずっといつづけるとしたら、有料の病院や商店がなりたたないことは火を見るよりもあきらかなことだからである。日常的なボランティアでも、失業率の高いところでは、ばあいによると、無給・無料のボランティアは、雇用を減少させ、労働者を困らせる可能性もでてくる。

あるいは、本来的には賃金を支払ってやるべきことを、ボランティアが安易に無給でひきう

けることは問題となる場合もある。あきびんなどの容器の回収は、消費者なり関係企業が責任をもつべきことであろうが、清掃ボランティアがチョモランマ山にまで出かけたりして代行しているのでは、いつまでたっても、消費者と企業の無作法・無責任は改められることがないであろう。看護ボランティアの松村さんが、場合によってはボランティアを「有料化」（註１３）したらいいと言っていたが、あきかん等の回収代をボランティアは関係企業に請求するといいかもしれない（エヴェレスト山の方では、マナーの悪い登山者からは帰る際、清掃費用に相当するものをとることにしているという）。

分野によっては、無給のボランティアは、資本の補修・欠陥の補いをするのではなく、逆に資本制のもとでの企業化自体を妨げる場合もある。あきびん等を始末することにボランティアがいっさい手をださずその放置の山に関係者が音をあげることになれば、法律での規制が話題になるとともに、回収しやすく再利用しやすい容器の製造のための関係の企業が設立されたりして、抜本的な解決が進められることになろう。そういう新しい企業化への試みを、無給のボランティアは、費用がゼロほどやすいものはないから、さまたげるものとなりうる。

6. ボランティアするものとされるものの間柄

ボランティアは、無給の勤労奉仕だといわれるが、その無給で奉仕する相手が家族・「うち」のものの場合は、ボランティアとはいわないのであって、それのそとの、本来は有給のあいだがら、つまり、経済的には等価交換のなされるべき、あかの他人とのあいだで 成立するものである。

そういう本来は有償であるはずの、あかの他人への労働の提供を、ボランティアは、無料・無給でする。ここには、そのあかの他人との関係に、無給という特別の事態を介しての特別の関係が成立することになる。こういう他人への援助では、その人とのあいだに、ふつう恩義の関係が形成される。援助するものは、「恩を売る」のであり、援助されたものは、「済まない」と感じて、「恩返し」をしなくてはと思い、いわば恩の貸借関係が成立する。だが、ボランティアのばあいには、「恩」というような意識や関係は、あまり起こらない。

ボランティアでは、贈与するとはいっても、生活の面倒全体を見て、お金も援助していくというような持続的で全面的な深いつながりではなく、一時の一場面での勤労を提供するのみの、多くの場合は、ごく浅い関係にとどまることにひとつの原因がありそうである。

しかし、それ以上に、ボランティアの受け手が、ふつうの貸借的な、つまりは、借りをかえせるような、めぐまれた状態にないこともかかわるように思われる。ボランティアは、しばしば、返報不可能の者にサービスを贈与することになる。老人の介護ボランティアにしても、老人は、「おかえしを」と思っても、その能力を失った者としては、それはできない。災害の罹災者、難民などもそういうことであろう。難民の場合は、さらに、「自分たちの不幸は、さかのぼれば、ボランティアできるような豊かな先進国の犠牲として生じたもので、その責任は、ボランティアする人たちの方にあり、援助は、感謝すべきものというより、当然のもの」と考えるようなこともあろう。あるいは、自尊心の強い地域では、外国からのボランティアを、高貴な自分たちの国

への「貢ぎ」「朝貢」ととらえるようなこともあるという。

また、ふつうのばあいでも、貸し借りの恩義は、集団のあいだでは組織や他人まかせとなって、とくに借り手の方の個人の意識のうちには成立しにくいように、ボランティアでも、集団と集団の関係になる大規模なボランティアになればなるほど、借りとも恩とも感じず感謝もしないというようになることもあろう。個人が個人的に親戚とかお金持ちから学資の援助をしてもらったというばあい、返さなくてもよいといわれても、借り・恩を感じることであろう。だが、公募される奨学金のようなばあいは、あまり恩義の意識はもたないものである。

しかし、ボランティアを受けて、ありがたいことと感謝した人は、自分に余裕ができたら、おそらくは「お返し」をと思うことであろう。神戸の震災の罹災者のなかには、日本海でのロシアのタンカーの流出油の回収作業に対してボランティアのお返しとの意識で参加したものがいた。だが、それでも、いわゆる「恩返し」の形はとらないのである。つまり、ボランティアしてもらった当の人自身にこれのお返しをするというのではない。お返しは、別の、支援・援助を必要とする人へと回されるのである。閉じられた関係のいわゆる「恩がえし」ではなく、ひらかれていて、同じように困っている人へとボランティアの輪を広げていくかたちになる。

特定の私的関係のなかで無償の労働を援助されたというのであれば、その相手へ「お返し」がなされる。神戸の震災のような場合でも、特定の個人のところへの個人的な支援・お見舞いに対しては、当然、支援されたひとは、その個人への借りを意識し、ゆとりができるとともに、なんらかのかたちで個人的な「お礼」「お返し」をされたはずである。

だが、ボランティアは、本来、「うち」のものにではなく、そとの無縁の人々へと愛の手をさしのべるもので、不定の匿名の間柄にあっての援助である。しかもしばしば集団的なものであって、援助者を特定することもままならないものになる。「だれかは知らないボランティアの方に援助された」ということであれば、「だれかは知らない方にボランティアでのお返しを」という意識になるのであろう。あるいは、広島市のみなさんからということであれば、広島への「お返し」を語ることになろう。しかし、それでも、広島よりは、岡山の人々が困っているのであれば、博愛的利他主義のボランティア精神への「お返し」は、あるいは「ボランティアをもってするお返し」というものは、その困っている方にまわすべきだと考えるのがボランティアではないか。

さらに、ボランティアをして労働を贈与する側からいうと、もともと、余裕・余暇に成立しているものとしては、かえしてもらうことなどはじめから思っていないことがある。一方的に贈与しているのである。菩薩行、無私の隣人愛を実践しているのである。普通には、大なり小なり貸借の意識のもとに贈与が行なわれるのだが、ボランティアの場合、勤労の贈与とはいえ、楽しんでやることが多いものとして、あるいは、そこに生きがいが発見できるようなものとして、「趣味」「あそび」と無区別になることさえある（したがって、受け手もそのことを感じることができておれば、「恩にきる」などと堅苦しい意識をもたないですむ)。豊かな経済外的価値を受け取っている享受者と感じる、「与えるよりも多くを得た」というボランティアにおいては、「恩を売る」とか「貸し」というような意識は本来的に存在しないのである。

註

１）金子郁容　『ボランティアーもうひとつの情報社会』　岩波書店　１９９２年　１５０頁

２）同上書　１５８頁

３）同上書　１５１頁

４）同上書　１５１頁以下

５） Volunteers in public schools ed. by Bernard Michael. 1990. p.4

６）水島照子『プロの主婦・プロの母親ーボランティア労力銀行の１０年ー』　ミネルヴァ書房　１９８３年.　　同『豊かさの生活学』　ミネルヴァ書房　１９９２年　参照

７）金子郁容　『ボランティアーもうひとつの情報社会』　岩波書店　１９９２年　１５９頁

８）同上書　１６１頁

９）高林澄子編著『専門職ボランティアの可能性と課題』　勁草書房　１９９０年　１６７頁以下

１０）Jone L. Pearce　Volunteers　The Organizational Behavior Of Unpaid Workers. 1993. p.168.

１１）ibid. p.168.

１２）ibid. p.168.

１３）高林澄子編著『専門職ボランティアの可能性と課題』　勁草書房　１９９０年　１６７頁

平成 10 年 3 月　　『ぷらくしす』(広島大学文学部倫理学教室･西日本応用倫理学研究会)1998 年春号 107~123 頁